

パリントンとノーブルとアメリカの現実

大 井 浩 二

あらためて指摘するまでもなく、『アメリカ思想主潮史』（1927—30）におけるV.L.パリントンの立場は、1930年代のアメリカにおいて「現実」を眺めるための支配的な視点となり、『科学革命の構造』（1962）の著者トマス・クーンの用語でいえば、アメリカの「現実」をとらえるための「パラダイム」になっていた。だが、そのパリントン的な「パラダイム」の崩壊した1950年代以降のアメリカにおいて、アメリカ人は一体どのような形で「現実」を眺めているのだろうか。この問題を考えるために、パリントンよりも二世ばかり若い歴史家D.W.ノーブルの主張を検討してみることにした。

といっても、この歴史家のことを知っている読者はそう多くないと思われるので、ごく簡単に紹介しておく。1925年生まれのパリントンはプリンストン大学を卒業後、ウィスコンシン大学で博士号を取得。1952年以来ずっとミネソタ大学の歴史学科で教鞭をとり、現在はアメリカン・スタディズの博士コースでセミナーを担当している。専門分野はインテレクチュアル・ヒストリーとカルチュラル・ヒストリーで、主要著書としては、『進歩思想のパラドックス』（1958）をはじめとして、『歴史を否定する歴史家たち』（1965）、『永遠のアダムと新世界の楽園』（1968）、『プログレッシヴ・マインド』（1970）などのほか、『変動の数世紀』（共著・1973）というアメリカ史の教科書も出版している。¹

ぼくがはじめてノーブルの名前に接したのは、いまから10年以上もまえ、小説家のセオドア・ドライサーと経済学者のソースタイン・ヴェブレンとを並べて論じた一文を読んだときだった。²19世紀末のアメリカ文化のきわめて重大な問題である「進歩の信念」を考えるにあたって、小説家と経済学者とが同じレ

ベルで取りあげられているというのは、非常に新鮮な驚きだった。しかも、インテレクチュアル・ヒストリーの研究において文学作品のはたしている役割をノーブルがくりかえし強調していたのが、いかにも印象的であった。「思想史家は、将来、インテレクチュアル・ヒストリーの主流の解明にあたって、技術的な哲学や科学の概念だけに注意を集中させることがすくなくなり、文学的、いや、すべての芸術的な表現のもっているダイナミックな重要性に対する理解を強めることになるだろう」というのが、そこでのノーブルの結論であったが、それは彼の著作にうかがわれる基本的な姿勢をはっきりと示しているといっても過言ではない。アメリカ研究とアメリカ文学研究との関係を手さぐりで考えていた当時のぼくには、その発言がこの上なく刺激的に思われたことを、いまでもはっきりとおぼえている。

その後、『永遠のアダムと新世界の楽園』の書評を書いたのがきっかけで、彼のほかの著作に目を通すようになっただけでなく、1974年の夏、あるリサーチのためにミネソタ大学に滞在したときには、彼のインテレクチュアル・ヒストリーの授業に出席したりして、この気鋭の歴史家からは、じつに多くのことを教えられることになった。こうした個人的な事情は別としても、エドマンド・モーガン、マーヴィン・マイヤーズ、レオ・マークス、ジョン・ハイアムなどとともに、1950年以降に活躍している重要な歴史家の一人に数えられているノーブルを取りあげるのは、現代アメリカにおける「現実」の意味を考える上で、十分に意味のあることといえるにちがいない。³ここではとくに『歴史を否定する歴史家たち』と『永遠のアダムと新世界の楽園』（以下、それぞれ『歴史家たち』、『永遠のアダム』と略記する）に焦点をあてながら、パリントンの「パラダイム」の変革という問題を考えることにしたい。

『歴史家たち』は、ジョージ・パンクロフト、F.J.ターナー、チャールズ・ビアード、カール・ベッカー、V.L.パリントン、ダニエル・ブラスティンという6名の著名な歴史家を取りあげて、「1830年から現代にいたるアメリカ史の著作における中心的な伝統」を規定しようとした書物である。だが、一体どうしてこれらの歴史家は「歴史を否定する歴史家」という定義をあたえられ

ることになるのだろうか。ノーブルによると、アメリカはそもそも歴史をもつことを否定した世界であった。「旧世界の伝統や制度を拒絶したときに、新世界には伝統や制度を絶対にうち立てないことを約束したピュリタンたちの子孫であるという理由で、アメリカ人はみずからの歴史的経験が時間のない、ハーモニーの状態にある、ユニークなものであると信じている」とノーブルは書いている。こうして、ヨーロッパ的な過去をいっさい否定したアメリカにおいては、したがって、「歴史」は存在することができない。かりに「歴史」が「変化する制度や伝統の記録」であるとするならば、はじめからその制度や伝統をもつことを拒絶しているアメリカには「歴史」の存在する根拠がないからである。

「歴史」をもたない国で「歴史家」になろうとするのは、まことに奇妙な状況といわざるを得ないのだが、そのような自己矛盾にアメリカの歴史家たちはいっさい気づかなかった。むしろ、「アメリカの歴史家が、そのような文化的伝統の重要なスポークスマンである」点にこそ問題がありはしないだろうか、というのがノーブルの主張なのである。

1830年から現在にかけて、それぞれの世代は、真実のアメリカの時間のないハーモニーと、外国からの人工的で、異質なパターンの侵入とを峻別する public philosopher となった歴史家の出現を見てきた。アメリカのユニークさとヨーロッパ文明からの隔絶という名目で、われわれが1960年代の現在において、「新しいイングランド」を樹立するためにやってきた最初のイギリス人の伝統を守りつづけているのは、アメリカの国民文化と歴史家の著述のこの上ないアイロニーにほかならない。

結局のところ、本書において論じられている代表的な歴史家たちは、「自然とのハーモニーの状態における生活様式」の実現という「ジエファソンの契約 (Jeffersonian Covenant)」を信じてつづけたまま、それを捨てることができず、ついには、アメリカの「現実」そのものを見失っている。アメリカは「自

然」であり、ヨーロッパ的な過去の欠如にほかならない、といった幻想に毒された、まさしく「歴史を否定する歴史家たち」ではあるまいか、とノーブルは痛烈に批判しているのだ。

では、ノーブル自身はアメリカの「歴史」をどう見ているのか。彼にいわせると、アメリカはもはや18世紀のジェファソンの共和国ではない。20世紀のアメリカ人は高度に発達した、複雑な産業社会に生活しているのであるから、このアメリカの複雑さに目をとめるならば、歴史家たちはなんとしても「ジェファソンの契約」との絆をたち切らねばならない。「アメリカ人は、自分たちが過去の歴史的伝統や過去の歴史的制度とかかわっていることをみとめるまでは、創造的な未来を視ることができない」という事実を認識する時期がきているのではないか、とノーブルは考えている。なぜなら、「アメリカ人に過去がないなら、アメリカ人には未来もない。無垢の重荷のゆえに、アメリカ人は、歴史的なドラマの存在しないのはアメリカだけである、と限りなくくり返すように運命づけられている。彼らは、みずからの存在の現実を否定する運命にある」からだ。『歴史家たち』におけるノーブルは、アメリカの「現実」を見ぬくことのできない歴史家たちに反省を迫っているといっていよう。

こう考えているノーブルにとって、アメリカ小説はまさしく発見の驚きと喜びをあたえるものであった。『永遠のアダム』の序文で告白しているように、1940年代のおわりに大学院の学生であったノーブルはF.J.ターナーやチャールズ・ビアードやV.L.パリンソンの歴史理論の崇拝者であったが、この三人こそは、「自然との国家的契約の主要な予言者」にはほかならなかった。ノーブル自身、彼がやがて、『歴史家たち』のなかで批判することになる歴史家たちの後継者たらんとしていた、といいかえてもよい。ところが、彼は「予言者たち」の非歴史的な姿勢に不満をもちはじめた。「わが国の文芸批評家のなんらかの著作は、時間のない統一が本当にアメリカ的経験の現実だろうか、という疑惑の種子をわたしの心に植えつけはじめた。」と彼は書いている。さらに、アメリカ小説を読みすすめることによって、「アメリカ史の現実は、ほかのすべての歴史と同じく、時間にあふれた変化のそれであること——変化はつねに

過去とかかわりあい、つねに未来につながっているがゆえに時間にあふれていること」が彼にはっきりわかってくる。

わが国の小説家たちは、アメリカのインテレクチュアル・ヒストリーの偉大なドラマは、ヨーロッパの移民が新世界へやってきたときの希望——つまり、彼らがそこで宗教的な再生を経験し、その経験によって旧世界の歴史的なコミュニティを超絶することができるという希望であったことを、わたしに信じさせるようになった。人間のコミュニティは未来のヴィジョンをもたねばならないと同時に、過去にもつねに根をおろさねばならないゆえに、この緊張がさけ得られないものであることを、わが国の小説はわたしに確信させた。

ここでもまた、インテレクチュアル・ヒストリーの研究における文学的想像力の「ダイナミックな重要性」が強調されているのである。と同時に、あえて小説家を歴史家の上位に置こうとする「歴史家」ノーブルの態度は、アメリカ社会におけるパリンTON的「パラダイム」の根深さを雄弁に物語っているといえるかもしれない。

いずれにしても、『永遠のアダム』という本は、そうした認識をもった歴史家がアメリカ小説と本格的に取り組んだ成果なのだが、その題名から R.W.B. ルーイスの『アメリカン・アダム』（1955）や H.N. スミスのいわれる「楽園の神話」を連想する読者がいても不思議ではない。副題に「1830年以降のアメリカ小説における中心的神話」とあるけれども、そこでいう「中心的神話」は「時間の超越」と説明されていることから明らかなように、それは時間のないアメリカ、自然とのハーモニーの状態にあるアメリカを夢みる神話なのだ。すでに述べたことから察せられるだろうが、ノーブルにいわせると、「アメリカ小説は、個人やグループの歴史を扱っているがゆえに、アメリカ文明の中心的神話—時間の超越—と対決し、しばしばそれを批判することを、作家たちに余儀なくさせている」と考えられる。ルーイスのいう「アメリカン・アダ

ム」は「新しい歴史の出発点に立つ、英雄的な無垢と厖大な可能性をもった人物」⁴であった。だが、ノーブルの考えでは、そのような人物は「文化的想像力の虚構」にすぎず、「欠陥のある、社会的な人間性を否定するイデオロギーから生まれたイリュージョン」にほかならない。いや、そのような「アメリカン・アダム」を否定することが、クーパー、ホーソン、メルヴィルからメイラー、ボールドウィン、ベローにいたるアメリカ作家の「形而上的関心」であったという主張が、『永遠のアダム』の基調音となっているのである。

この「アメリカン・アダム」の対立概念としてノーブルの提起するのが「永遠のアダム」なのだが、これによって彼がなにを意味しているかは、たとえばアメリカ人は「すべての人間のなかに存在する永遠のアダムを認知することから生まれる謙譲（humility）という、キリスト教の根本的な要素を失っている」という一文から察することができるだろう。『白鯨』の結末について、「イシュメイルだけが救われるのは、クィーケグによって改宗させられた彼が、この世においては救済されることのない永遠のアダムとの同一性を受けいれているからである」と語っている言葉も参考になる。あるいはまた、『すべて王の臣』におけるジャック・バーデンが「彼の心にふかく触れ、それゆえに彼に人間性あたえ、同情心をもたせる悲しみを経験したとき、はじめて永遠のアダムと結びついていることを発見した」とか、「悲しみが人間の経験の中心を占めることを認めないかぎり、アメリカ人は不毛な疎外状態におかれる運命にある」というホーソンの警告を、ロバート・ペン・ウォーレンがあらためて発している、とかいった指摘もなされている。「永遠のアダム」が「人間性からはなれて立ち、人間の条件に拘束されることを拒絶するアメリカン・アダム」と反対の極に立つ存在であることは、どうやら疑問の余地がなさそうだ。

こうみえてくると、『歴史家たち』も『永遠のアダム』もともにアメリカ的国民性に深く根ざしたジェファソン主義への批判という点で、共通した姿勢を示していると考えられる。すでにふれたように、『歴史家たち』は6名のアメリカ史家を「ジェファソンの契約」との関連で論じているけれども、この「自然とのハーモニーの状態における生活様式」を希求する「契約」こそ、『永遠の

『アダム』でいう「アメリカ文明の中心的神話」の母体をなすものであったとい
い切ってよい。『歴史家たち』の最後のパラグラフにおいて、ノーブルは「完
璧な運命というロマンティックな幻想を、この20世紀にもちつづけることがで
きるのか」という問いかけを発していたが、その問いかけは、アメリカ作家が
「ジェファソンのな夢への復帰の不可能性」をはっきりと警告していたにもか
かわらず、「多くのアメリカの知識人は、この古めかしい信念に対して忠実で
ありつづける道を選んできた」という『永遠のアダム』のエピローグの言葉と
正確に対応している。アメリカ人はつねに「永遠のアダム」のイメージに背を
むけて、時間の支配しない「新世界の樂園」を願望するばかりなのだ。「最初
のヨーロッパからの開拓者たちが新世界の意味を、旧世界の人間が救済される
樂園であると、あまりにも明確に規定したため、その子孫たちはいまだに彼ら
の社会的経験に対して、別の意味を発見することができない」（『永遠のアダ
ム』）という発言は、アメリカの「現実」がパリントンの「パラダイム」で
は捉えきれないことをはっきりと物語っている。読者としては、アメリカ人の
思考に巣くっている「アメリカ的な自然との契約の不変性」（『歴史家たち』）
にあらためて驚かされると同時に、「アメリカン・イノセンス」という「古め
かしい信念」に終止符を打とうとするノーブルの「断固たる否」の叫び声を聞
きとらねばならない。

だが、ノーブルにおける「現実」認識のパターンは、パリントンのそれと具
体的にどのように異っているのか。この点を明らかにするためには、ノーブル
自身のパリントン観に目をやっておく必要があるだろう。すでにふれた『歴史
家たち』の第6章はパリントン論にあてられているので、その内容を簡単に紹
介しておきたい。

ノーブルはまず、『アメリカ思想主潮史』3巻が消えてゆく伝統の最後のあ
かしとなる記念碑的な業績であったことを指摘して、「この伝統の根が18世紀
の啓蒙思想と、究極的には17世紀のピューリタニズムにあることを明確にしてい
る」と語っている。パリントンとピューリタニズムとの結びつきは、一見いか
にも奇異に思われるかもしれない。というのも、『アメリカ思想主潮史』の第一

巻は、ピューリタニズムのはげしい攻撃に終始しているからである。だが、パリントンの真の攻撃目標は、ピューリタニズムの本来の精神を忘れはてた指導者たち、旧世界ヨーロッパと深いつながりをもつカルヴィン主義を信奉して、ルーターの神学を拒絶したマサチューセッツの神権主義的な指導者たちにはかならなかった。したがって、パリントンは、アメリカに神の王国を——ジョン・ウィンスロップのいわゆる「丘上の町」を建設しようというピューリタンたちの理想には共鳴していたと断言することができる。みずからリベラルで、ジェファソンのと規定する彼の理想主義は、17世紀のピューリタンの理想主義に結びついているのである。

しかも、そのようなピューリタニズムの精神につらぬかれた書物を書いたのは、専門の歴史家ではなくて、一介の英語教師にすぎないパリントン、「人生の終りかけた、無名のアクトサイダー」であった。ノーブルはこの点に注目して、『アメリカ思想主潮史』がきわめてピューリタンの「エレミアの嘆き」の性格をそなえていることを強調する。

17世紀末のピューリタンの説教師たちが、聴衆にむかって、選ばれた民という神との特別の関係から逸脱しているので、墮落から立ち帰って、国家的な契約を守らなければ大きな不幸に直面しなければならなくなる、と警告したように、1920年代のパリントンは、読者にむかって、彼らもまた、トマス・ジェファソンによって表現されている国家的な契約——忠実なる者は、自然の原理に従っているかぎり、ハーモニーの状態で生きることができると約束している契約——に立ち帰らなければ、歴史の恐怖を経験しなければならなくなる、と警告していた。

たしかに、『アメリカ思想主潮史』の著者は、ひたすら「ジェファソンに帰れ！」と呼びかけていたのだったが、彼の悲劇性は、そのジェファソンの夢が、現実のアメリカにおいては、もはや実現不可能な夢のまた夢となっていた点にあった。

ノーブルの指摘をまつまでもなく、フロンティアを失った20世紀のアメリカにおいては、ジェファソンの自然との「契約」は、もはやなんの意味をもたなくなっている。そのような「契約」が実行されるなどと考えるそもそもの根拠が完全に消え失せてしまっているのである。「パリントンは、その契約が都市的・産業的アメリカにおいて実現され得るという希望をさし示すことができなかったゆえに、その声は荒野で叫ぶ絶望的な声であった」と『歴史家たち』の著者は書いていた。この言葉は、「都市的・産業的アメリカ」においてジェファソンの農業ユートピアの夢を追いかけるパリントンの時代錯誤性を、はっきりと指摘しているのである。『歴史家たち』におけるノーブルは「パリントンのジェファソン主義の退行的側面を強調している」というリチャード・ホフスタターの評言があったことを、ここで思い出してもいいだろう。⁵

いずれにしても、ジェファソン主義に対するノーブルとパリントンの態度が根本的に異っていることは、あらためて強調するまでもないと思われる。だが、その点をもうすこし明確にするために、この二人の歴史家のアメリカ作家に対する評価を分析してみたい。たとえば、アメリカン・リアリズムの代表的な小説家W.D.ハウエルズに対して、両者は一体いかなる評価をくだしているのだろうか。

『アメリカ思想新潮史』の著者によると、ハウエルズはアメリカを「神の微笑が宿っている土地」とみなすアメリカ人、「寛大な民主主義と結びついているこの国において、文化がこれまで世界に知られなかったようなすばらしい子孫を、やがて生み出すにちがいない」と確信しているアメリカ人であった。さらに、「オハイオのフロンティアの子供」としてのハウエルズは、終生、民主主義の精神を忘れることがなかった、と述べているのは、同じ中西部に生まれたパリントンとして、きわめて当然の評価であったかもしれない。勿論、この小説家をフロンティアの子供と規定するのは、あまりにも単純であって、パリントン自身、その「ゆたかな教養」に読者の注意をうながしてはいる。だが、結局のところ、ハウエルズは「アメリカ生活における最善のものの具現者」であり、「ジャクソンの民主主義の子供」であった、という言葉には、ジェファ

ソン主義者としてのパリントンの本心がはっきりとうかがわれるのである。

こうして、パリントンは「民主主義者」，「やさしい良心をさづけられた正義を愛する魂」，「人間の要求にかなった文明をアメリカに創造しようとする自由な人間の兄弟愛を夢みる理想主義者」（傍点は引用者）といった表現を用いながら、ハウエルズのアメリカ性をくりかえし強調している。さらにまた、「彼の愛情は、彼の青年時代を形成した初期の農業的な秩序へと、盲目的に帰って行った」という説明を読むと、ハウエルズとジェフアソン主義との結びつきが、読者にはっきりと印象づけられるのである。どうやら、「農業的な秩序」を愛する「理想主義者」としてのハウエルズは、パリントン好みのヒーローの条件をすべて兼ねそなえた典型的なアメリカ人である、といい切ってもよいだろう。

したがって、きわめて当然のことながら、ハウエルズは、「金ピカ時代の経済的矛盾」を無視することができなかった。1880年代のアメリカにおいては、「社会的不安」がストライキやロックアウトといった形をとって、表面に現われはじめていたが、ハウエルズは、そうしたアメリカ的風景の単なる傍観者になり切ることはできなかった。ヘイマーケット事件において、「シカゴのアナキスト」のために立ちあがったのは、ハウエルズが「正義」を愛する「理想主義者」であったからにはかならぬ、とパリントンは主張する。

彼〔＝ハウエルズ〕は平和を愛したが、彼のまわりには戦争があった。そこで人生の午後にあった彼は、金ピカ時代のアメリカに社会的民主主義の福書をひろめる仕事に立ちむかった。…彼の文学的態度の都会性のゆえに、そのおだやかなスタイルの底に横たわる感情のはげしさを多くの読者は見落としている。しかし、個人的な資本主義のあり方を吟味し、その成果を検討した結果、彼がそれを否定し去ったことは明白である。それ以来、生涯のおわりにいたるまで、彼は資本主義を憎みつづけ、それに反対する説教をおだやかに語りつづけた。

ハウエルズのまわりに若い世代が集ったのも、彼の「リベラルな精神」のせいであつたし、「彼の同情が世界の不正に関心をもつ、すべての者にむかつていた」からにはかならない。「彼は農民の問題の、人間的な側面を理解していた」というパリントンの評言は、彼自身と同じようにリベラルで、ジェファソンのであつたハウエルズに対する賛辞を受けとっていいだろう。

たしかに、『アメリカ思想主潮史』の著者はハウエルズの小説家としての限界には気づいていた。代表作の『運命の浮沈』(*A Hazard of New Fortunes*, 1890)にしても、せっかく「残酷な経済の現実」を扱いながら、結局は「くわしい細部の山」に埋もれて、本質的な問題がぼやけてしまっている。「芸術家としてのハウエルズは、その職業をあやまった。彼は体質的に小説家でなかった」とパリントンは断言しているのである。だが、それにつづけて「彼は別の時代、異質の世界に置かれた18世紀の精神であつた」と書くとき、小説家ハウエルズに対する非難がアメリカ人ハウエルズに対する共感に転化しているのを読者は感じとらざるを得ない。「18世紀の精神」がほかならぬジェファソンの精神であることは、あらためて指摘するまでもあるまい。いや、パリントン自身が20世紀のアメリカという「別の時代、異質の世界」に置かれた「18世紀の精神」であつたとさえいい切ることができるのだ。

人間性にあふれた、愛すべき魂の持主であつた彼は、金ピカ時代のあり方に身をまかせきっていないアメリカ——変動のさなかでさえも美を愛し、文化のためにつくしていたアメリカにおいて、やさしく、寛大であつたすべてのものを具現していた。

ハウエルズ論のおわりに書かれたこの一文には、「都市的・産業的アメリカ」でジェファソンの夢を追ひ求めるパリントンの感概がこめられているといつても過言ではあるまい。

だが、こうした「18世紀の精神」としてのハウエルズは、ノーブルによってまっぴりと否定されている。たしかに、ノーブルもまた、オハイオ州出身の小

説家が、「民主主義の谷間」の生まれであった事実を重視している。父親の影響もあって、ハウエルズは「農業的な単純さのヴィジョン」を強く抱いていたし、1865年にヨーロッパから帰ってきたときにも、この「中西部出身の若者」は南北戦争後の「アメリカ的風景」に満足しきっていた。「アメリカの完全性と、アメリカのヨーロッパに対する道徳的・技術的優越性にすっかり満足しきってハウエルズはもっとも重要な国の、もっとも重要な都市で、もっとも重要な雑誌の編集にたずさわっていた」とノーブルは書いている。すくなくとも、1860年代のハウエルズは、「進歩としての歴史という概念を受けいれていた」と考えていいだろう。

しかし、こうしたハウエルズの信念はすこしずつ揺ぎはじめる。編集者の仕事をつづけているあいだに、ヨーロッパに対するアメリカの優越性を疑問視するようになるだけでなく、1880年代のはじめにニューヨークという「新しい産業帝国の経済的な首都」へ移り住むようになったことで、「新しい、ダイナミックな現実」に目を開かされるようになるのだ。

彼は都市のスラムを観察し、このジャングルを生み出したといわれる資本主義の組織に対する批判を検討した。英米の社会主義者、とくにトルストイから、彼は、ジェファソンの夢が階級闘争と個人の利己主義という資本主義の倫理によってむしろ歪められていること、貪欲と強奪の福音が社会的な協力とキリスト教的な愛の倫理にとってかわられるまで社会の平和はやってこないことを学んだ。

つまるところ、ジェファソンの共和国という「理想」が1870年代から1880年にかけてのアメリカの「現実」でないことを、ハウエルズは痛感するようになった、とノーブルは書いている。

こう考えるノーブルにとって、ハウエルズは「ジェファソンの夢への復帰の可能性」を見ぬいていた作家にはかならなかった。彼が『アニー・キルバーン』(Annie Kilburn, 1889)と『運命の浮沈』をハウエルズの代表作とみ

なしているのは、この二つの作品に共通のテーマが「不完全な人間のための、避け得られない環境としての複雑な社会という現実」であるからだ。そこには「ジェファソンの共和国は、もはや存在しない。アメリカの現実には複雑な個人の複雑な社会である」というハウエルズの認識がはっきりとうかがわれるのである。パリントンにとって、ハウエルズはジェファソン主義者であつたが、ノーブルにとっては、むしろ反ジェファソン主義者としかいいような存在となっている。したがって、一般に高く評価されている『サイラス・ラパムの出世』(*The Rise of Silas Lapham*, 1885)は、ノーブルにいわせると、「勝利を占めるイノセンスという理想を追求するノスタルジアにあふれたロマンス」にすぎない。そこでは「ジェファソンの共和国の理想」が語られているばかりであって、「都市の誘惑を拒絶したあと、ラパムが田舎のより単純な環境に引退するのは、失われた楽園に対するハウエルズのノスタルジアを示しているかもしれない」とノーブルは書いている。アメリカの「現実」を見事に描いた先の二作に比較すると、この『サイラス・ラパムの出世』は、「ファンタジー」であり、「逃避への試み」としかいいようがないという指摘は、パリントンの批判者としてのノーブル自身の姿勢を浮き彫りしているのだ。

結局のところ、ノーブルにとって、ハウエルズは「異質の世界」に置かれた「18世紀の精神」などではない。それどころか、19世紀末のアメリカの「複雑な社会」としての現実を見すえた、すぐれた「小説家」にはかならなかった。

彼〔＝ハウエルズ〕はジェファソンの共和国へのノスタルジアを一掃してしまっていた。彼は新しい社会を受け入れることに威厳を見出していた。…アメリカン・イノセンスの持主としてのハウエルズは、人間のなかに見出した永遠のアダムに驚きはするが、ついに彼もほかのすべての人間もホーソンのいう罪ぶかい人間世界のメンバーであることを認める。…ハウエルズがリアリズムの小説にもどるためには、永遠のアダムという事実を人間経験の中心に置かねばならないし、登場人物を歴史のなかで生活させねばならない。

こうした一連の発言は、ノーブルが歴史を否定するパリントンのような歴史家でないことを、はっきりと示している。「複雑な人間」の「複雑な社会」がアメリカの現実であるという主張を、ハウエルズの作品のなかに聞きつけている事実は、アメリカの歴史を「制度や伝統の複雑さから自然の状態の進歩」とみなすパリントンの「パラダイム」を彼が全面的に否定していることを証明しているのである。

ここで興味ぶかいのは、『永遠のアダム』の2年まえに出版された『ジェファソン主義とアメリカ小説』（1966）と題する小冊子のなかで、H.M.ジョウンズが「ハウエルズの精神は19世紀末に投げこまれた18世紀の精神であった」と書き、この作家の「ラディカルなジェファソン主義」をきわめて高く評価している事実である。ほぼ40年をへだてたパリントンとジョウンズの主張の一致は、単なる偶然によるものとして片付けることができるだろうか。周知のように、ジョウンズといえば、『アメリカとフランス文化』（1927）や『アメリカ文学の理論』（1948）などでも知られている学者だが、その彼が、「ジェファソンの人間への信頼」が「アメリカ人の基本的な信念」であることをくりかえし主張して、「一般的にいて、ジェファソン主義に興味を示すことをやめた」現代アメリカを猛烈な非難攻撃しているのは、一体なにを物語っているのか。どうやら、アメリカをエデン的世界とみなすジェファソンの衝動をもちつづけているジョウンズは、パリントンの「パラダイム」でアメリカの現実を眺めているらしい。つまるところ、ジョウンズとノーブルとでは、現実を見るためのフィルターが正反対であって、たがいにまったく異なった現実を眺め、その結果、まったく反対の評価を、たとえばハウエルズにくだすことになったのだ。

いずれにしても、ノーブルの現実に対する態度がパリントンのそれと根本的に異っていることは否定できない。後者のそれを「プログレッシヴ」と規定するならば、前者のそれは、ジーン・ワイズにしたがって「カウンター・プログレッシヴ」と呼ぶことができるだろう。そして、こうしたノーブルの態度が1950年代以降のアメリカにおいて、歴史家の新しい現実把握のパターンを反映

していることも、あらためて強調するまでもない事実である。ノーブル自身、『歴史家たち』の冒頭で、「この本は思想史の分野で研究している学者集団のあいだで育っている伝統を表明していると考えたい」と述べ、1950年以降、教えられることの多かった研究者として、リチャード・ホフスタター、ディヴィッド・レヴィン、レオ・マークス、マーヴィン・マイヤーズなどの名前をあげているが、これらの歴史家はいずれも「カウンター・プロGRESS」な歴史家として認められているのである。また、『永遠のアダム』のはしがきのなかで、ノーブルはレズリー・フィードラー、H.N.スミス、ライオネル・トリリングの3人の名前をあげ、これらの文芸批評家の「著作が、1950年代のはじめにおいて、アメリカ史に関する著作における『ピュリタンの伝統』とわたくしと呼ぶものに対するわたしの忠誠心に終止符を打つ上で、決定的な役割をはたした」と書き記している。トリリングがパリントンの最初の批判者であったことから考えて、この発言はノーブルの「カウンター・プロGRESS」な姿勢を裏書きするものといえよう。

ノーブルがミネソタ大学の同僚のP.N.キャロルと書いたアメリカ史の教科書『変動の数世紀』は、「伝統的な政治史にうかがわれるのが普通のエリートの偏見」を排して、「マイノリティ・グループや女性や貧しい者の役割」を強調し、「これらのアウト・グループと多数派を占めるWASPの男性とがどのように関わっているか」を考えようとする立場から書かれていて、まことに斬新な内容にあふれているが、当然のことながら、そこにはパリントンの「パラダイム」の崩壊のプロセスについても語られている（この本の後半の南北戦争以降を扱った部分をノーブルが担当している）。

そこでの説明によると、17世紀以来ずっと多くのアメリカ人が抱いてきたプロテスタント的で、プロGRESSな歴史観は、1950年代におわりを告げることになった。「近代の歴史は社会の複雑さから、自然の単純さへ移行しているということを信じるのは、もはや不可能となった」という発言は、パリントンの「パラダイム」でとらえられた進歩としての歴史が終ったことを示している。こうした「1940年代まで、アメリカ的想像力を支配してきた進歩の概念の

衰退」は、エコロジーという新しい科学の発達と無関係ではなかった。エコロジーはまた、政治や経済などの分野に支配的であった「連続的な成長という価値」を否定することになり、それに伴って、社会科学の分野におけるさまざまなパースペクティブに対する批判が生まれるにいたった。「社会学者が1950年代にもっていた、変化の性質は漸進的で、発展的であったという支配的な議論とは対照的に、1960年代の社会学者のあいだに見られる重要な傾向は、変化がしばしば革命的で、ドラマティックであると主張することであった」とノーブルは書き、そのような立場を打ち出している書物の筆頭に、すでにふれたトマス・クーンの『科学革命の構造』をあげているのである。この本が彼のインテレクチュアル・ヒストリーの授業で指定参考書になっていた事実から判断して、ノーブルの立場をパリントンの「パラダイム」の崩壊に関連づけて論ずることは、かならずしも見当はずれではないだろう。

とはいっても、このノーブルの姿勢を、ジーン・ワイズのように「カウンター・プログレッシヴ」といい切ってしまうことには、若干の疑問が残る。たしかに、ノーブルは「進歩」としての歴史を否定する歴史家にはちがいないのだが、最近の彼はW.A.ウィリアムズによって代表される「ニュー・レフト」的な歴史観に傾斜しているように思われる。さきのアメリカ史の教科書のなかでも、彼はウィリアムズに関する記述にスペースをあたえ、この歴史家の主要な著作である『アメリカ史の輪郭』（1961）や『アメリカ外交の悲劇』（1962）などを簡潔に紹介している。「1970年までに、多くのアメリカの歴史家はアメリカの過去における拡張主義的な諸勢力の分析に同意し、アメリカ史におけるラテン・アメリカやインディアンとの交渉や、太平洋のむこうのアジアへのアメリカの進出などのなかに、アメリカの帝国主義の証拠を見つけようとしていた」とノーブルは結論している。この本の3年まえに出版された『プログレッシヴ・マインド』においてもまた、ノーブルは「わたしの進歩主義に関する分析は、ウィリアム・アブルマン・ウィリアムズが『アメリカ史の輪郭』のなかで確立したアメリカ史の見取り図と一致している。わたしは、アメリカにおける支配的な想像力がコミュニティから逃れようとする想像力であった、という

彼の考えに賛成する」と書き記している。

ジーン・ワイズの指摘をまつまでもなく、「カウンター・プロGRESSIV」の立場と「ニュー・レフト」の立場とでは、現実のとらえ方に大きな相異が見られる。だが、そのいずれもパリントンの「パラダイム」に対立する立場であるという点では、正確に一致しているのである。「カウンター・プロGRESSIV」な立場をとるにせよ、「ニュー・レフト」的な立場をとるにせよ、ノーブルが「進歩」としての歴史という「パラダイム」を真っ向から否定していることに変わりはない。二つの立場のあいだをゆれ動いているという事実は、彼がアメリカの現実をとらえるための新しいパターンを模索していることを、なによりも雄弁に物語っているというべきではあるまいか。ぼくが彼からもらった著書に、「よりよい種類の進歩への希望をこめて」とか、「もう一つの歴史への希望をこめて」とかいった言葉が書き記されているのも、その彼の模索ぶりと無関係ではないのだ。

ぼくとしては、パリントンの「パラダイム」を否定しつつける歴史家ノーブルに、新しいアメリカの意味と価値を発見しようとしているアメリカ人ノーブルを重ね合わせずにはいられないのである。

- 注1 *The Paradox of Progressive Thought* (University of Minnesota Press, 1958), *Historians Against History* (University of Minnesota Press, 1965), *The Eternal Adam and the New World Garden* (Braziller, George, Inc., 1968), *The Progressive Mind* (Rand McNally, 1970), *The Restless Centuries* (Burgess Publishing Co., 1973).
- 2 David W. Noble, "Dreiser and Veblen and the Literature of Cultural Change," in J. J. Kwiat and M. C. Turpie, eds., *Studies in American Culture* (University of Minnesota Press, 1960), pp. 139-152.
- 3 とくに Gene Wise, *American Historical Explanations* (The Dorsey Press, 1973) を参照。
- 4 R. W. B. Lewis, *The American Adam* (University of Chicago Press, Phoenix Books, 1955), p. 1.
- 5 Richard Hofstadter, *The Progressive Historians* (Vintage Books, 1970), p. 493.
- 6 H. M. Jones, *Jeffersonianism and the American Novel* (Teachers College Press, 1966), pp. 42-43.

Summary

Parrington and Noble and the American Reality

Koji Oi

David W. Noble, Professor of History at the University of Minnesota, is the author of *The Paradox of Progressive Thought* (1958), *Historians Against History* (1965), *The Eternal Adam and the New World Garden* (1968), *The Progressive Mind* (1970) and *The Restless Centuries* (1973). In *Historians* Noble severely criticizes those American historians who have had a strong influence as the chief spokesmen for the ideal of the timeless America and, after discussing the major American novelists in *The Eternal Adam*, he concludes that, far from being timeless unity, the reality of the American experience is the reality of timeful change. To further emphasize Noble's importance as an American historian, this paper compares him with V. L. Parrington, one of the prophets of the American "covenant with nature," and shows that the two are totally different in their approach to "reality" in America. While the author of *Main Currents in American Thought* is known for his profound faith in the idea of progress from "cultural complexity" to "natural simplicity," Noble recognizes the fact that the American reality is a complex society of complex individuals. Thus Noble's counter-progressive writings should be read in terms of the "Paradigm Revolution" in the 1950's, when the Parringtonian view of history as progress began to be challenged.